

# 國學院大學学術情報リポジトリ

## 「I was born」の現在性： 文学教材としての可能性について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-05-11 キーワード (Ja): 吉野弘, 文学教育, 中動態, 『日本昆虫記』, 帝国石油 キーワード (En): 作成者: 高橋, 大助 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000356">https://doi.org/10.57529/0002000356</a>

# 「I was born」の現在性

## ——文学教材としての可能性について——

高橋大助

### 1 はじめに

かつて学燈社が刊行していた『国文学 解釈と教材の研究』は、毎号、日本文学やその周辺領域に関する特集が組まれ、レポートや卒業論文を為そうとする日本文学を専攻する学生や教材研究を試みる国語教員にとって便利な雑誌だった。その1992（平成4）年3月号は、「作品別 現代詩を読むための研究事典」として発行されており、吉野弘の「I was born」も立項されている<sup>(1)</sup>。北原白秋「落葉松」から始まる事典項目の前に「詩と詩の研究批評はこれでいいのか」というテーマでの、藤井貞和と原子朗の対談が掲載されており、そのなかで藤井は、谷川俊太郎、吉野弘、茨木のり子、石垣りんの名をあげ、「教科書の現代詩として、中心に読まれている」ことに疑義を唱える。

吉野さんは、教科書に載り始めのときが、三十代か、四十代という油の乗り切ったというか、最先端の書き手で、いい作品なのですけども、その後そのまま掲載され続けていて、二十年三十年教科書の編集は変わらず止まってしまっているのじゃないでしょうか。だからもう、吉野さんだって今は六十を超えられたくらいの歳でしょうし、それが今の現代詩であるというふうに言うのは、やはり時代がどんどん先に進むのに教科書の世界だけが止まっています<sup>(2)</sup>。

藤井は次いで、吉野の作品を「現代詩」ではなく「近代詩化」しつつあるものとし、「多様性とかリズムとかメタファーの現代性」といった条件を満たした「現代詩」をこそ、国語教室に招き入れるべきとしているのである。教科書編集にも携わっていた藤井の、内省的でもあるはずのこの発言は、教科書論としては傾聴に値する。ただ、30年後の教科としての国語の改革に際し、藤井の提案が受け入れられたようには思えないし、「I was born」は、現行の「言語文化」でも複数の教科書が採用している<sup>(3)</sup>。

「I was born」に対する評価は、そもそもこの特集号に立項されていること自体が物語っているともいえるが、この項の執筆者である田村圭司は、「自分を語らない詩人」として吉野の姿勢を批判的に捉える大岡信も、そこに吉野の「私性の昇華の仕方」を見て肯定する清岡卓行も、この詩に関しては、ともに「感謝」という言葉を用いて語るほどに「評価は一致して高い」と「解題」に記す<sup>(4)</sup>。「経験に即し感動にもとづきながらも、新しい認識に達しないかぎり歌わない」（清岡卓行1967）<sup>(5)</sup> 吉野がその認識に至ったことを示す、「父親となることによって、一人一人の人間の生死を超えたある永久連続に触れた」（大岡

信 1957)<sup>(6)</sup> 記念碑的な作品として評価されているのである。

## 2 僕の父

——やっぱり I was born なんだね——

父は怪訝<sup>けげん</sup>そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

——I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね——

「文法上の単純な発見」によって、生命と「意志」に関しての視角が開かれた息子の軌道を導こうとして父は「蜚蜉」という生物を物語る。その昔、誕生して二、三日で斃れるその生の意味を捉えあぐねていた父に、「友人」が「拡大鏡」の中の蜚蜉の雌を示す。口は退化し胃の中は空。

ところが 卵だけは腹の中にぎっしり充滿していて ほっそりとした胸の方にまで及んでいる。それはまるで 目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが 咽喉もとまで こみあげているように見えるのだ。淋しい 光の粒々だったね。私が友人の方を振り向いて〈卵〉というと 彼も肯いて答えた。〈せつなげだね〉。<sup>(7)</sup>

息子の「単純な発見」に対して、直後に妻を亡くす、既に大人となっている父の発見はまるで物語の中の出来事のような。言うまでもなく、蜚蜉の雌のこの有り様は、生物としての種の継続に資する選択、いわゆる生存戦略である。その「生き死に」の様相が悲しく思えてくるのは、そこにヒトの「生き死に」を見てしまうからだ。父と友人は蜚蜉の雌の図像からヒトの物語を見出して共感しあっているのである。その物語は、「意志ではない」という息子の発見を否定するものではない。父は僕の言い分を受け止めながら、ただ、蜚蜉物語に続けて妻の死に様を語り、「受け身」に迷惑のニュアンスが添加されることを回避しようとしている。「僕」の誕生という事実は、まるで神話のように語り直され、聖母のイコンが描き出されるのである。

父の話のそれからあとは もう覚えていない。ただひとつ痛みのように切なく 僕の脳裏に焼きついたものがあつた。

——ほっそりした母の 胸の方まで 息苦しくふさいでいた白い僕の肉体——

雌の蜚蜉の図像は「僕」の幻視に置き換えられる。「焼」に代わりの「灼」の字は、唐土の古詩で「灼灼其華」と桃花の盛んなるさまの形容に用いられるが、灼熱、灼爛と記せば、赤く爛れた焼き印を思い起こさせる。幻視は息子の内部での出来事だが、かれの「文法上の単純な発見」は、父の見出した物語に接続され、聖痕の如く「僕の脳裏」にしっかりと刻まれるのである。このように父の物語は換骨奪胎され、「母の中の僕」へと書き換えられてしまう。父が語る蜚蜉のように儂く斃れた恋人は、育む生(母)と在ろうとする生(胎児)の結合としての母胎へと変換されるのだ。

そのようにして父のビジョンを消し去った息子は、想像界の微睡へと戻ってしまう。

自らが想起した甘美なイメージに陶然となり、「意志」以前の世界に留まろうとするのである。「ふさいでいた」との過去形で語る以上、自身の内に描き出した母子一体の図像を現実ではないと僕は認識している。しかし、誕生以前のイメージに魅了され、自らの意志で生まれるのか、生まれさせられるのか、最終的な判断を停止した僕に忘却される父には、子を象徴界の秩序へと追い込む威厳を持ち得ない揺らいだ父権を見ることになる。

清岡卓行は、先に田村が引いた論考の中で「ついでに言えば」として「吉野弘が珍しく他人に、つまり父に、無意識的にではあるが少し意地悪くなっていることに気づくかもしれない」とする（清岡卓行 1967）<sup>(8)</sup>。おそらくは「父の話のそれからあとは もう覚えていない」といふフレーズを指すのであろう。というのも、清岡は「I was born」と同じく、第一詩集『消息』に収められた「父」において、父親が「きびしく無視され」「やさしく避けられ」ることが「アフォリズムふう」に語られていることに注目してみせるからである。そのうえで清岡は、父には「吉野自身の像が重ね合わされて」おり、「彼の子供に対する関係がむしろ新しく課題として」この詩に現れているとする。岩波文庫版『吉野弘詩集』（小池昌代編 2019）に付された「自筆年譜」によると、この詩が世に出る 1952 年の秋、吉野は伴侶を得ている<sup>(9)</sup>。「吉野はこの詩を作った当時或る女性を愛していて、やがて結婚して人の子の親となるということを強く意識して」（野村由香理 1985）いたのである<sup>(10)</sup>。しかし、この「新しい課題」は、吉野個人のものである以上に、詩が構想された時代の、父なる存在が共有する課題だったのではないだろうか。

「父」に権威を賦与するものはすでに存在せず、人はあたかも「父」であるかのよう  
に生きるほかないのかも知れない（江藤淳 1965）<sup>(11)</sup>。

庄野潤三が 1965 年に刊行した『夕べの雲』の登場人物へのこの評言は、そのまま「I was born」の父に向けられてもおかしくない<sup>(12)</sup>。僕は自らが幻視して召還した母の庇護のもと、父の言葉を消去する。父は避けられるだけでなく、自らの物語を奪われ上書きされてしまっているのである。「I was born」の誕生は『夕べの雲』に先んずること 10 余年。作品の母胎となったものに目を向けるのは意味のある作業かも知れない。

### 3 「あるべき状態」と詩

「自分を語らない詩人」という大岡信の批判的な指摘を吉野は認めて、「あるがままよりは、あるべき状態に」心が動くとしている（吉野 1978）<sup>(13)</sup>。それは、労働者としての体験が吉野にもたらした姿勢というべきだろう。先にも引用した「自筆年譜」によれば、吉野は、1943 年、17 歳で、帝国石油に入社し、地元・酒田の山形鉱業所に勤務し始める。1941 年、国策会社となった帝国石油では、戦後、民間会社への移行に際し、激しい争議が繰り広げられたが、吉野もその当事者の一人であった。

「年譜」の 1949 年の項には「労働組合運動が活発化し、前々年より専従役員になり首切り反対ストに加わる」とある<sup>(14)</sup>。GHQ が求めた労働改革の流れにあって、「労働組合法」が

発布された1945年末には、帝国石油でも事業所等で労働組合の結成が相次ぎ、翌年「これらの組合は、合同して会社との間に単一労働協約を締結する目的で、4月25日に帝国石油労働組合協議会を結成した」と『帝国石油五十年史・経営編』（帝国石油株式会社1992）とある<sup>(15)</sup>。帝石労組には5地方32支部があり、吉野は1947年から山形地方の山鉾支部の専従となったのだろう。同書によれば、帝国石油は、財政の立て直しには「事業場の統廃合」が不可欠として、1948年5月に過剰人員として3353名の解雇予定を表明している。労組側はストライキで対抗、中央労働委員会による調停案提示でも解決せず、8月、GHQの介入によってストライキは中止されたが、人員整理問題の労使交渉は進展しない。

11月17日に至り、労働省から団体交渉による早期解決が勧告され（…）整理人員を2016名にまで減少することでようやく了承が成立し、同日、協定の仮調印がなされた。ところが、11月27日開催の労組の臨時中央大会において、仮調印された協定が否決されるという事態となり、新たに交渉団を組織して再交渉を開始することになった<sup>(16)</sup>。

賛成21票に対し反対69票の大差での否決の背景には、労組組織としての機能不全があったことを『帝石労働争議史』（帝国石油株式会社調査室1949）は伝えている<sup>(17)</sup>。結局、人員整理に関する合意は、労組内の分裂という事態と引き換えに行われることになった。まず動いたのは、吉野が所属する山形地方であった。

山形地方の大会はこの問題をめぐってはげしい議論が斗はされて遂に単一脱退を決議するに至つたのである。即ち中央大会が常に秋田地方の少数意見によつて攪乱されゆがめられてしまつてゐると考へ、今後之と同一組織内に止まつてゐることは徒に破壊的急進的な少数分子の行動によつて大衆が被害を被るのみであると判断したのである<sup>(18)</sup>。

共産党との強いつながりを持つ秋田地方の戦術に対する不信感と、このまま意見対立が続き「交渉が遅延するうちに会社に追い打ちをかけられることを危惧した」山形地方は、247名の人員整理を受け入れ、12月4日、会社側と単独協定を結ぶ。

次いで、新交渉団も仮調停の線で12月6日に妥結した。共産党の拠点であった秋田地方は、単独闘争を主張して交渉団から脱退し、約50日にも及ぶ無秩序な闘争を展開したが、12月末ごろから内部批判が高まって事態收拾への動きが始まり、逐次、交渉妥結に向つた<sup>(19)</sup>。

泥沼と形容できる労働争議のさ中で二十代前半の若き吉野弘は何を考えたのだろうか<sup>(20)</sup>。第二詩集『幻・方法』刊行と同じ年に書かれた評論「詩とプロパガンダ」（吉野1959）からその一端を伺うことができる<sup>(21)</sup>。

僕はコミュニ<sup>ニ</sup>ストではないけれども、一人の労働者として、労働者が商品であるような境遇から脱出するためには、プロパガンダというか、通信の必要を感じているわけで、それを有効に行うにはどうすればいいかということを、他人事ではなく痛感してしているわけだ<sup>(22)</sup>。

自身と同じ労働者のためのあるべき詩の姿を、吉野は模索する。しかし、「通信」に重きが置かれ過ぎると「読む方の立場から言えば、詩ではなく、プロパガンダを読まされて、



味気なさを感じてしまう」ことになる。さらに「詩であって、しかもプロパガンダの役目を果たしている」という作品も詩本来の在り方ではないと吉野は考える。吉野は詩の「効果」よりもその「成立」の有様を重視しようとする。前者への傾斜は「詩を美とか思想とかいうものの容器」として「美や思想を詩の中に任意に入れることが出来る筈だ」というふうに、結果から成立の方へ類推する立場につながるが、「詩は、その成立に当たって独自の過程を経由しなければならない」と吉野は考えるのである。「任意にえらぶ」ことも「見殺しにする」ことも出来ない、詩の原動力としての感動を、明晰にすることで発展させるべきと強調する吉野は、そこから「詩を認識」と捉えてみせる。

詩に限らず、芸術は、事物を人間の意識の中にもたらすための一種の言語だと思っただけだ。感動というのは、謂わばその端緒だ。感動の未発展の曇った状態から確実と明晰との段階に高めるための作業が則ち認識だ<sup>(23)</sup>。

そして、その認識作業は徹底される必要がある。

この作業の遂行を妨げる要素を注意深く排除してゆかないと、感動というかたちで与えられた新しい経験の意味が明らかにならないでしまうわけだ。感動を、もし、それ自身に即して発展させないで、それ以外の事を述べるのに都合のいいように、一部だけを役立てようとするれば、その認識作業が不完全に終わってしまう<sup>(24)</sup>。

吉野は、認識を不完全にさせる詩作における一種の功利主義が「新しい経験を許容しないという態度」を採らせたり、「まだ存在しない経験を存在したかのように見せかけ」たりすると警鐘を鳴らす。後者を、「マコミュニズム的立場の詩」にしばしばみられるプロパガンダだとしたうえで、いずれの姿勢も「利用しようする意図は真実を」歪めることにつながり、「曲げないで真実のままに提出することを要求できるのが、その人の思想だろう」と述べる。思想はあるべき態度へと人を導く。そして、思想は認識としての詩のためであり、決してその逆ではない、と吉野は宣言する。

僕が、芸術の領域で、ひとつの思想、態度に期待するのは、その思想、態度が、どれだけわれわれの認識を拡張してくれるか、どれだけ認識に新しいものをもたらしてくれるかということであって、思想そのものの解説ではないんだ。或るひとつの思想が、従来見落としていたものを、新しい次元で掬いあげることが素晴らしいわけだ。そしてその作業が、どこまでも詩人自身の経験に即して展開される限りに於いてだね<sup>(25)</sup>。

思想を体現するのではなく、経験と思想が切り結ばれることで見出される新たな地平に至ること。吉野の構想する詩はそうした機能を果たすことになるのだろう。純粋な詩論だが、ここには労働組合専従役員時代の吉野の声が聞こえてくる。感動に即して詩を為そうとする吉野は、自分を語らなければならない。しかし、「商品であるような境遇」に触れ、心動かされた私をそのまま歌うことはかれにはできない。必要なのは、詩によって「あるべき状態」、オルタナティブな世界を示すことだ。プロパガンダに陥りやすいプロレタリア文学とは異なる方法で、「あるべき状態」を模索することが、吉野の詩人としての始まりだったのである。

第一詩集『消息』に「I was born」とともに収められた「さよなら」や「burst」、「亡きKに」など労働者を題材とした作品には、その頃の吉野の有り様が色濃く表れている。そうした姿勢の詩人は、「あるべき状態」に至るまで、「burst」の悪夢に襲われ続けることになるに違いない。

そうしたこの時期の吉野にあって、「I was born」は一見するとやはり異質な作品のようにも思われるだろう。しかし、「詩とプロパガンダ」の最後に言及される「愛国詩」についての吉野の見解を読むと、この作品がもつ時代性がより明確になるはずだ。戦時中、「本気で愛国詩を書こうとした詩人は、詩をプロパガンダとは考えなかったと思う」とし、かれらにも拠り所となる「感動」はあったと認めている。しかし、「思想のあいまいさということと同時に、そこから生じた興奮を無批判に展開させるということも可能であったことが問題」であり、かれらは詩を「認識」と捉えることが出来ていなかったと評する。「思想」と「認識」の重要性が再度語られるのは、「愛国詩」の詩人たちも「あるべき状態」への回路を開こうとしたからであろう。プロレタリア文学に対してと同様に、かれらと我との違いを明らかにする必要を吉野は痛感していたに違いない。かれらが「拠りどころ」としたものを、吉野は「血の共有という感情でとらえた擬思想」としている。

つまり思想ではなくて、血なんだ。血の共通性という立場にたって、感動を自分の中に呼び入れるというか、感動を掻き立てるというか、そういうふうにしたんだろうと思うよ<sup>(26)</sup>。

この記述は、「I was born」の注釈としても読めるのではないか。散文詩の中の気弱で繊細な父の背後に、この愛国者たちの亡霊が見える。

#### 4 母なるもの

「生の中心をなす場は、わたしたち二人のあいだに位置していた」（ジャン・フランソワ・ビレテール 2017）。——これは述懐でない。連れ添った伴侶を失くした男にもたらされた新しい認識である<sup>(27)</sup>。「あいだ」は境界線を意味しない。領土におけるそれとは逆に、あなたからはわたしに、わたしからはあなたに属しているように思われる場所である。そこに生の中心があるというのは、越境する者に存在の中心を委ねることを意味するだろう。互いの生を冒し合う、そのような関係にあるふたりが、一方を失えば、その事実を、己が生のあるべき場所の喪失として実感することになるのである。そのような関係にある愛し合う「わたしたち」に、子が生ずるとき、〈親／親〉としてふたりは分節される。子は「わたしたち」の生の中心をなす場に到来し、そこに存在し始める。曰く、子は鏝。わたしたちの「あいだ」に在って、しばし、両者を接続する存在となるべく宿命づけられている。

しかし、「I was born」に描き出されるのは、〈親／〉という家族の形であった。父にとって、家族は誕生と喪失の記憶が交差する場としてある。一方、子にとっては、家族は始まりから不在を抱えた場所であった。僕は初めから母のない世界へと示現したのである。

にもかかわらず、喪失の記憶を語る父の語り方は、喪失を家族の起源に関わる出来事として受け取るよう僕に促すかのようだ。そのコンテクストから家族を理解しようとすれば、母の不在を自身の生の条件として僕は受け取ることになるだろう。父はなぜ、そのように物語るのだろうか。

母の思い出のない子に対して、父もまた、孕んだ妻、出産した妻の思い出しか持ち得ていない。かれは、妻なる者を喪失し、かつ母となる者を知る機会を奪われた。この二重の喪失と引き換えにかれには父という役割が与えられた。喪失の記憶ゆえに、〈親／〉という家族の形は、父にとって「あるべき状態」の崩壊を意味する。〈親／〉という家族の不自然さを、「あるべき」家族の系譜の内に位置づけるには、妻の不在に意味を与えなければならぬ。妻の死と息子の誕生との間に必然を見出す、妻の死を親の宿命として受容する必要がかれにはあったのだろう。誕生は確かに意志ではない。しかし、それを「目まぐるしく繰り返される」生命のサイクルの中の出来事と捉えずにはいられない。父は、妻の死を生命の連続性のうちに了解しようとするのである。死せる妻を、生成と豊穡を司る大地の母神になぞらえようとしている、とまでは言えないだろうが、「一人一人の人間の生死を超えたある永久連続」(大岡 1957)を世界の理と見る、生氣論的な世界観への近接は、主体としての私をその還流の中に解消する契機となる。父の試みは、誕生は「意志ではない」という息子を受け止め、しかし、その根拠として、個より上位の「意志」を構想し、そこへの合流を促すことにつながるのではないか。その父の姿は「愛国詩」の生産者たちに重なって見える。息子を導く父の戦略は、知るや知らずや、「血の共通性」を言い立てて自分の側に取り込もうとする愛国詩人たちのそれと何ら変わりが無いのである。

父に蜉蝣の雌の姿を示し、父と共犯関係にある「友人」にはモデルがいることを、吉野弘は自作解説の中で明言している(吉野 1967)<sup>(28)</sup>。それによると、「I was born」という叙述が気になり、しかし、どうにもとらえあぐね、「この厄介物から逃げ出して、随分長い間うっちゃって」置いた吉野は、「大町文衛という方の『日本昆虫記』に出会い、その中の「はかない虫」の項」を読んだ。

かげろう  
蜉蝣の話なのですが、こんなことが書いてありました。蜉蝣の口は全く退化して食物を摂取することが出来ず、胃を解剖しても、入っているのは空気ばかり。これでは短命なもの無理はないが、雌の腹の中をみると、卵だけが充満して胸の方まで及んでいる云々<sup>(29)</sup>。

吉野の回想は、稿を為すにあたって改めて原典の「はかない虫」の項に当たったのだろうと推測されるレベルの正確さである。『日本昆虫記』は、1941年大阪朝日新聞夕刊に連載され、同年、朝日新聞社から単行本として刊行されている。いくつか版を重ね、1953年には新書版の「朝日文化手帖」の一冊となり、1959年角川文庫に収録されるが、その「あとがき」には「終戦後情勢も変り、また昆虫学界にも進歩が著るしいなどの事由によって、時代遅れの箇所も出て来たので(…)其等の点を改め、文章も吟味して、定本として恥ずかしくないものにした」とある<sup>(30)</sup>。「I was born」の初出は1952年2月であるため、



吉野が参考としたのは新書や文庫ではない。上記の「あとがき」に「初版を加えて三度装幀を改めて刊行され」とあるので、このいずれかを吉野は手にしたことになるだろう。原典は戦前のもは旧仮名・旧漢字が使用され、1949年刊行の5版で、新カナ表記が用いられているので、これを手にした可能性をまず考えるべきだが、戦前の版を読んでいて、自作解説執筆の際に改めた可能性もある。いずれにしても、拡大鏡越しに父が見た蜉蝣の体内の様子が、『日本昆虫記』の記述に即していることは明らかだ。「自作解説」に引かれた件に続いて「これではまるで卵を産むためだけに世の中に出て来たやうなもので、その役目がすめばすぐにも命はいらないのである」と記述されるが、ここもまた、「何の為に世の中に出て来るのか」という父の問いと響き合うだろう。ところで、『日本昆虫記』の「はかない虫」の項は、以下のように書き起こされる。

朝に生れて、夕に死す、といはれる蜉蝣<sup>カゲロウ</sup>は、あらゆる生けるもの、儂い宿命を一人に背負はされてゐるやうに見える。美しい透明な翅を背中に立て、つまめば潰れさうな繊弱な身體をもつたその虫を見れば、いかにも脆いその命が分かるやうな気がする<sup>(31)</sup>。コオロギ博士と呼ばれた著者の、父・桂月譲りの文才によって、蜉蝣は象徴性を帯びた「はかない虫」となる。このイメージは、「I was born」にも引き継がれ、失われた妻の造形に影響を与えているだろう。しかし、真にかれの心をとらえたのは「儂い宿命」ではなかった。

私の目に突如、蜉蝣の腹の中の小さな卵の粒々が迫ってきました。亡くなった母を、私は思い、母の胎内の私を想像していました。これは、母に対する追悼の気持からだったと思いますが、間髪を容れず、例のI was bornが飛び込んできました。そうして私は以前長くこだわっていたことの意味を一瞬理解しました。決定的だった心像は、蜉蝣の卵です。それは、ひとつの意志でした。生み出されるというひとつの宿命の心像でありながら、それは、みずから生をうけようとしている意志の心像だったわけです<sup>(32)</sup>。

「この心像によって、生を負い目と感じていた私から一瞬解放され」と吉野は述べ、「一種の虚無感を、卵と、母の中の私の心像が、力強くはね返してくれた」とする。『日本昆虫記』には単行本、新書、文書、いずれにも優曇華と呼ばれる葉に産み付けられた卵の挿画はあるものの、卵を抱いた雌の蜉蝣の解剖図は添えられていないので、卵に関する心像は町の記述に喚起され吉野が想起したイメージと断定できよう。すなわち、蜉蝣を「儂いその命」と見る町に対し、吉野はその卵に「生が死を圧倒している」姿を見出したのである。そのイメージと「母の中の私」という想像が重なり合い、吉野は「新しい認識」に至った。この「自作解説」に従えば、詩のラスト・シーンは、外部から与えられた物語の磁場に強く引き寄せられながらその物語を読み替え、「新しい認識」に至った吉野の内面のドラマの図像化として捉えることになる。そして、そのドラマは、父ではなく、息子の内面に移植されるのである。僕は父の物語を受け継ぎ、母の中にある自身の「肉体」をイメージする。「永久連続」の中に自身の血肉があることを実感する僕の姿は、「愛国詩人」の企みと軌を一にする父の試みが半ば成功していることを示す。しかし、母の内に留まることを夢想する僕は、「永久連続」の一部として生ずることを拒んでいるようにも受け取れる。

もとより、母との一体化もまた、個であることの放棄にほかならない。不在の母、イメージとしての母は、息子を目覚めさせることはない。一度読めば、忘れがたいこのラストシーンには、吉野が抱えた苦悩が陰画のように書き込まれているのではないだろうか。

## 5 生まれる、すなわち、中動態の世界へ

吉野は「本当の表現者というのは、あるべき姿よりは、むしろ現にある姿に正直に深く執着する人」であるとし、「私が「我々」の一人であるとき、そこに何がしかの実践的課題が加わってくるとき」に詩への意欲が高まる自分を否定的に捉えている（吉野 1978）<sup>(33)</sup>。労働者として身についた姿勢が、真の詩人への道を阻んでいるかのように聞こえるが、「あるべき状態」を志向する試みのアポリアに吉野が対峙しているととるべきだろう。「愛国詩」も「コミュニズム的立場の詩」も、「我々」の「あるべき状態」の実現を口実に、「わたし」を「認識」から疎外する様子を吉野は身を以て体験している。しかし、個人の「感動」をそのまま言葉にすることへの警戒を拭い去ることも吉野にはできない。その行為が「興奮を無批判に展開」して、プロバガンダとなってしまうかねない考えるのである。ダイナミックな生命の力に魅了されながら、ただ微睡んでいるかに見える僕の姿に、吉野自身の葛藤が重なって見えてくる。

しかし、生まれることの本質に目を向け始めた僕が宙づりにされたままとなるのは、わたしたち読者の世界観のせいなのかもしれない。僕には、また別の異国の言葉の恩恵を受ける必要があるようだ。生まれる、は、「意志が前景化しない」（國分功一郎 2017）言語に拠って理解すべきだったからである<sup>(34)</sup>。

叙述において二項対立を形成するのは能動態と受動態である、という世界にわれわれは囚われている。しかし、サンスクリット語や古典ギリシア語など、かつてのインド＝ヨーロッパ語には能動態と対峙する「中動態」と呼ばれる叙述があり、受動態はこの「中動態」から発生したのである。そして、「生まれる」はもともと、「中動態」を取る動詞であった。言語学者エミール・バンヴェニストの論考に拠りながら、「中動態」への注目によってオルタナティブな世界への視角を開こうとする國分功一郎は、「I was born」をこう批評する。

吉野弘が中動態のことを知っていたら、「意志」に対するこの疑いはより鋭いものになっていただろう（國分 2017）<sup>(35)</sup>

「能動態と受動態の対立は「する」と「される」の対立であり、意志の概念を強く想起させる」と國分は言語学者・バンヴェニストの論考に拠ってそう整理する。一方、能動態と中動態が対立する言語世界においては「主語が外にあるか内にあるかが問われるのであって意思は問題とならない」のである（國分 2017）<sup>(36)</sup>。國分は、「I was born」の中の僕の言葉を書き換えてみせる。

中動態だよ。正しく言うと人間は生まれる時、自らが動作主である過程の内部にいるんだよ。意志は問題じゃないんだ<sup>(37)</sup>。

事の次第が端的に語られてしまう。間違いなく、生まれるという働きは生まれ来るわたしの内で起こることだ。何かの意志（やそれに類するもの）にそうされるのではないし、自ら生か非・生かを意志するわけでもない。もとより、ひとが生きて在るためには、自身を取り巻く世界との関わり合いが必須である。外部への作用、能動的な有り様なくして、生まれた者は、ひととはなれない。中動態の世界でも、「在る」「生きる」は能動態としてのみあるのである（國分 2017）<sup>(38)</sup>。問題は、受動と能動の二項対立を受け入れるとき、「生まれる」が意思に関わることと錯覚され、そこから、有限な個か、永久連続か、という二択を迫る世界へと閉ざされてしまうことになるところにある。その意味では、僕が再び目覚めるには中動態の世界からの誘いが必要となるのかもしれない。

國分が言うように、吉野がこの「中動態」という叙述の有り様を知ることがあれば、この作品の「自作解説」で「新しい認識」への経緯を語る際、「意志」という言葉にもっと注意深くあったであろう。蜂蟻の雌の腹の中の卵というイメージから吉野が感得したのは、まさにひとつひとつの卵の中で起こりつつある出来事の躍動感とその原動力であったはずだからだ。

先に引用した論考で野村由香理は、吉野が卵のイメージから感得したものを「生への盲目的な意志」と述べている<sup>(39)</sup>。「盲目的」という形容は、生まれる、という言葉の中動的な有り様への近接を読み取ることができるのではないだろうか。この形容が作品の解釈から導き出されたものかどうかはわからない。野村はこの論考の基となった卒業論文をまとめるにあたり吉野に会い「東京のあるデパートのスカイレストランで、延々六時間もお話を伺った」と論考の「補記」に記しており<sup>(40)</sup>、作品の読み解きに関して、吉野から直接教示された可能性もあるだろうが、「盲目的な意志」という言葉が示唆に富むことには変わりはない。さらに言えば、この詩に「新たな〈生〉へのしかけとなっていく〈性〉に対する父親としての罪の意識」を読み解く<sup>(41)</sup>、1985年の野村論は、「I was born」の国語教材としての〈未来〉をさし示しているのである。

## 6 教室の中の現在性

彼は誰れどき、父と子は、「白い女」に遭遇した。夏の寺の境内。蝉はまだ鳴いていただろうか。

女は身重らしかった。父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から目を離さなかった。

頭を下にした胎児の柔軟なうごめきを 腹のあたりに連想し それがやがて 世に生まれることの不思議に打たれていた。

教室であれば、まず問わねばなるまい。子は、なにゆえに「父に気兼ね」するのか、と。気兼ね、という言葉のニュアンスからしても、僕は、その行為が適切ではないが、父から強く叱責されるようなものとは考えていないことになるはずだ。そもそも、妊婦の腹の内へ興味は、知的な好奇心に基づくとさえいいうるのではないか。しかし、既に少年である

僕はその好奇心に素直になることができない。生の成り立ちへの興味が、性欲へつながることを自覚し、躊躇するのである。性的欲求への後ろ暗さが、「気兼ね」の理由をとしてみずは考えられるだろう。そこから、「気兼ね」のいま一つの理由も明らかになる。野村の言葉を借りれば、父にとって「新たな〈生〉」である者が、妊婦の腹の中へ興味を示すことで、父の「〈性〉に対する罪の意識」が刺激されるだろうと、僕は予期しているのである。自分の妊婦への好奇心が父にも後ろめたさを感じさせることになる、その仕組みを僕は既に理解しているのだ。逆に言えば、罪の意識を共有しうる存在として、僕は父を捉えていることになる。妊婦との遭遇は、父と息子をつなぐ、罪の意識という紐帯の存在を明らかにするのである。

しかし、この時、二人には想像すらできていないことがある。それは、見られる側の思いだ。妊婦はこの二人連れをどう見たであろう。妊婦にとって興味は身の内の胎児であり、見も知らぬ父子など、気にも留めまい、という読み解きは説得的ではない。父はともかく、僕は、女の腹をジッと見続け、透視するかのように胎児の有り様を想像するのである。その視線を女が感じないといえるだろうか。

「I was born」と題された詩には、妊婦や母からの視点がない。そのつぶやきすら聞こえてこない。妊婦は観察の対象であり、母は聖なるアイコンとして彼岸に輝く。既に見たようにこの詩が、吉野弘自身の体験に即して作られたものである以上、女の視点の不在を論うのは、ないものねだりとの誹りをうけるかもしれない。しかし、「新たな〈生〉へのしかけとなっていく〈性〉」がテーマであるこの作品で、女の言葉に居場所がないことは、今日の教室においては、議論の対象とすべきことである。そこで行われる、背景化された存在の声を聞き分けるための協働の学びは、同時に、教室を「多様性を原動力」とする場に設え直す契機ともなりうる。

性的指向に関してマイノリティであることを自覚し始めた生徒にとって、恋愛が扱われる教材は警戒を要するものとなる。そこに描かれた男女の恋愛を、自然なものとして疑わない教室でのそうした教材への取り組みを、不条理な暴力と感じるようになるかもしれないからだ。マジョリティが立つ地平に無自覚な者は、教師も生徒も、この手の暴力を行使してしまいかねない。だからといって、古歌に学びながら、自分たちの相聞歌を作るといような言語活動に際し、「配慮」して、同性間のそれを許容したところで、事態の本質的な解決にはならない。マイノリティへの「配慮」では、相変わらず少数者を不自然な存在として囲い込むことになるのである。マジョリティにとって必要なのは、自らの居場所を安定させる少数者への「配慮」ではなく、マイノリティに見えている世界へ想像的に近づこうとすることだ。もとより、自身の姿勢が背景化する存在へのまなごしの獲得の必要性は、どのような立場にあっても変わることはない。「I was born」を教材として「不在」の視点を読み解くことの今日的な意義を、そこに求めることができるだろう。

いまひとつ、この教材がもつ現在性を指摘する必要があるだろう。不妊治療の進歩によって、「〈生〉へのしかけとしての〈性〉」の様相は大きく変化した。体外受精の技術の高度化は、



性行為とは異なる生殖活動をヒトにもたらしたのである。もはや「生まれる」過程は一樣ではなくなった。この新たな過程を経て誕生する生命を育むのは必ずしも雌雄のペアとは限らない。また雌雄であっても、第三の存在の助力を得て〈親／親〉となるペアもある。いやその第三の存在もが親の一人として構成された家族も実現している。伝統的な家族観に固執するグループがどう抗しようとも、新たな過程を経て誕生した者が、一定数存在しているというのが、今日の教室の真の姿である。そうした出自を持つ生徒にとって「生まれる」は、限りなく受動的な有り様を示してしまう。かれらが「生まれさせられた」と言い立てるとき、ひとはどう応えるべきだろうか。これは今や正しく社会的な課題である。不妊治療の経験者に限らず、この生殖の有り様が人類にもたらされた以上、だれもが「I was born」の父の立場を無視できない。「生まれる」はもともと「中動態」を取る動詞であることからわかるように、自分でか、他者によってか、という二項対立にはなじまないんだよ、などと言葉を重ねても、子どもが「受動態」を以て大人を糺すとき、その耳には届かない。かれらはその時、「生まれる」ではなく、「在る」「生きる」について聞いているのである。そしてそれは何も、治療を経て生まれた子どもに限ったことではないだろう。「予測困難な時代を迎える」準備を要請される、いま教室に集う子どもたちは、誰もが「生まれる」を受動態として受け取る可能性を持っている。かれが「在る」「生きる」ためには、「様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構成することができる」力が必要だと学習指導要領は謳う。その分析に誤りはないかもしれないが、能力の獲得は本当に解決を導くのだろうか。受動態の呪縛から逃れるにはもっと別の「手立て」が必要なのではないか。

たとえば、その人生を理解してくれる仲間、自らの愛に素直に向き合うことを教えてくれる出会い、自身による自身の人生の重みの認識（國分 2017）<sup>(42)</sup>

私が私の人生を「生きる」、生きて「在る」ことをわが身に受け入れる「手立て」が示唆されるこの言葉は、「僕」たちを微睡からこの世界へと優しく招く。I was born. ——偶然、生じた私は、その瞬間から取り巻く世界の干渉を受け、同時に、自らも世界をうちに引き込もうとする。その意味で、世界の本質は応答可能性にあるが、世界との対話は気ままなおしゃべりではない。何を引き入れるか自由に思われても、世界からの干渉は常にあり、それはときに選択の余地がないほどの強さとなることもある。そんな折には、我々はつい「宿命」だの「運命」だのという言葉の口にして世界を呪い、私を嘆く。しかし、

完全に自由になれないということは、完全に強制された状態にも陥らないということである。中動態の世界を生きるということはおそらくそういうことだ。われわれは中動態を生きており、ときおり、自由に近づき、ときおり、強制に近づく（國分 2017）<sup>(43)</sup>。もしかすると、そうした世界に吉野弘は身を置こうとしていたのかもしれない。

メーデーの行進の中に吉野さんがいた。そこは帝石労組員のしんがりのところで、



事務系統の人が多いうだった。だから行列も他の部分とくらべていくらか自由な雰囲気をもっていたが、その中でも彼はひときわ自由のように見えた。しかし、それ以上に私の注意をひいたのは、他の事務系統の人が持つ自由さが浮草のそれで、ともすれば、行列からはみ出しそうなのに比較して彼のそれは行進自体の雰囲気とは決して矛盾するものではないことであった（大滝安吉 1957）<sup>(44)</sup>。

吉野は「行進の中にいて、行進にとけこみ、しかも終始、行進の意味を考え続けていたにちがいない」と大滝は推測する。「あるべき状態」への関心が、かれに行進を強制し、強制を受けながらも「あるべき状態」に至るために自由に「認識」を働かせ続けていたということではないだろうか。吉野は中動態を知るまい。しかし、その振る舞いには、中動態の世界を予見させるものがあつたのではないか。その意味では、「I was born」は、教室において、作家論的な探究の学びを行うことに積極的な意義を見出しうるテキストでもあるだろう。この詩を現代詩の範疇にあるものとするには、藤井同様、躊躇することになるが、国語科の文学教材として十二分に現在性を持つテキストであることは言を俟たない。

## 注

- (1) 「國文學 解釈と教材の研究（第 37 巻 3 号） 作品別 現代詩を読むための研究事典 詩はどのようによまれてきたか」（學燈社 1992（平成 4）年 3 月 20 日）、110-112p。
- (2) 注 1 前掲誌、23p。
- (3) 現行の「言語文化」では、数研出版、第一学習社、東京書籍、ちくま書房、三省堂が採用している。
- (4) 注 1 前掲誌、110-112p。田村はこの項で、吉野の「「我々」が一緒に「あるべき姿」を求める発想」への注目を促している。
- (5) 「吉野弘の詩—戦後詩への愛着 4」（「文学」Vol. 35、岩波書店、1967 年 4 月）、99p。
- (6) 大岡信「吉野弘論」『大岡信著作集 7 巻』（青土社、1978（昭和 53）年 1 月）、498p。初出は、「笈」39 号（1957 年 7 月）。詩の同人雑誌である「笈」のこの号は、その発行母体である「笈の会」から自費出版された吉野の第一詩集『消息』を祝し「消息出版記念特集号」として発行されている。
- (7) 「I was born」は、「詩学」（1952（昭和 27）年初出。第一詩集『消息』（笈の会、1957（昭和 27）年 5 月）に収録。1959（昭和 34）年 6 月に飯塚書店から発行された第二詩集『幻・方法』に再録される際、「淋しい 光の粒々」が「つめたい光の粒々」に改められている。感傷を排した後者の表現の方は「生き死に」の循環するシステムのゆるぎなさが強調される。教科書は『幻・方法』版を採用するが、本稿では詩の成り立ちにも言及するため、『消息』版の表記に従う。なお、引用は岩波文庫『吉野弘詩集』（小池昌代編、岩波書店、2019 年 2 月）に拠った。
- (8) 注 5 前掲論文、105p。
- (9) 注 7 記載の前掲書、350p

- (10) 野村由香理「吉野弘の詩について—国語教材としての考察—」(「奈良教育大学国文—教育と研究 第8号」、奈良教育大学国文学会、1985年3月)、38p。
- (11) 『成熟と喪失—“母”の崩壊—』(河出書房新社、1967(昭和42)年6月)、250p。なお、引用は『講談社文芸文庫』版(講談社、1993年10月)により、引用ページは同書のものである。
- (12) 佐々木幹郎はこの父に「庇護すべき父親のイメージ」を読むが、それは父としての彼を権威づける存在が失われていることを意味するだろう(「どこから誕生をとらえるか—吉野弘追悼—」(『吉野弘の世界』青土社、2014年5月)、21P。)
- (13) 吉野のこの発言は、注4前掲の『大岡信著作集7』の「月報」(4-5p)に「射られた的」として寄稿されたエッセイの中のもの。
- (14) 注7前掲書、349p。
- (15) 『帝国石油五十年史』(帝国石油株式会社 1992(平成4)年3月)、52-53p。同書は「経営編」「技術編」「海外編」に分かれおり、以下引用はすべて「経営編」からである。
- (16) 注15前掲書、57p。
- (17) 同書は、人員削減を巡る労働争議直後に作成された手書きガリ版刷りの報告書だが、表紙中央にタイトルの「帝石労働争議史」、左下に「帝國石油株式会社 調査室」、右上に「昭和二十四年四月」と日付がいずれも活字で記載され、㊟の印が押されている。「序」には発行主体である「調査室」を代表して「神原泰」と署名された文章があり、「組合側の記述により詳しく且つ組合側への批判のみに偏してゐる(…)之は執筆者は組合側の情勢には通じて居るが、経営陣内のことについては正確な資料が乏しかつた結果であり、調査室が社内の機関である以上、止むを得ない結果でもある」と記す。報告書の公平性を自ら疑問視する発言は、むしろ経営陣に向けられた批判ともいえる。帝国石油はこの数年後、その経営の在り方が国会でも取り上げられ、通産省から会社再建を促す異例の通告を受けることになるのである。
- (18) 注17前掲書、126-128p。
- (19) 注15、前掲書、57p。
- (20) 注10前掲論文の中で、野村はこう考察する(38p)。  
「I was born」創作における吉野の執筆動機は、直接的には三年間の療養体験からくるものであるが、単にそれだけではなく、それに先立つところの労働争議や敗戦による、精神的な打撃も絡んできているとすることが出来る。
- (21) このエッセイでは、A・B、二人の人物に対話によって考察が進められる。主にBが考察を述べ、Aがその確認を行う形式になっている。以下引用したのは、主にBの発言とされるものである。引用は注6前掲書収録のものにより、ページ数は同書のものである。エッセイには「1959年現代詩」とあるが、遺憾ながら初出の出典に当たること出来なかった。
- (22) 注21前掲文、89p。
- (23) 注21前掲文、91p。
- (24) 注21前掲文、91p。
- (25) 注21前掲文、92p。

- (26) 注 21 前掲文、93p。
- (27) ジャン・フランソワ・ビレテール『北京での出会い もう一人のオーレリア』（笠間直穂子訳、みすず書房、2022年12月）、185p。同書は、スイスの著名な中国文学者がその伴侶となったウエン文<sup>ウエン</sup>について書いたエッセイであり、「北京での出会い」は彼女との出会いが描かれ、「もう一人のオーレリア」は彼女を失くしてからの日々について日記体の形で記される。引用部は後者の中の一節である。
- (28) 「詩の生まれる予感」（『詩の本1・詩の原理』（筑摩書房、1967年10月））。なお、以下引用は、吉野弘『現代詩入門（新装版）』（青土社・2014年）により、引用ページは同書のものである。  
「自分を語らない」詩人・吉野弘は、しかし、作品創作の舞台裏を隠さずに記す。和合亮一は、この『現代詩入門』について、「詩作品の手直しの行きつ戻りつを、つまり推敲の逡巡の時間をありありと包み隠さずに何度でも語ろうとする意思が、初心者の中にはとても嬉しかった」（「満員電車の中で吉野弘さんの隣に座ってみたかった」（注12前掲書。40p））と述べる。
- (29) 注 28 前掲文、248p。
- (30) 著者が定本という、角川文庫版は、現在では「角川ソフィア文庫」の一冊として上梓されている。「あとがき」の引用は、そのソフィア版（2019年12月）から行った。
- (31) 大町文衛『日本昆虫記』（朝日新聞社、1941（昭和16）年10月）、113p。
- (32) 注 28 前掲文、248p。
- (33) 注 13、前掲文、4p。
- (34) 國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』（医学書院 2017年4月）、97p。
- (35) 注 34、前掲書、315p。これと注 37 とは、第三章の注 25 として書かれものであり、対象となる本文（90p）は次の通り。  
ここから先の表（バンヴェニスト作成の「中動態」「能動態」の動詞のリスト）のⅡの欄に掲げられている動詞、「生まれる」「死ぬ」「続いてくる」「わが物とする」「寝ている」「座っている」等々を見れば、その内容の中動態的な性格がかなりよく分かるはずである。  
この件への注は「ここで少なからぬ人が吉野弘の有名な詩「I was born」を思い起こすのではないだろうか。」と書き始められる。
- (36) 注 34、前掲書、97p。
- (37) 注 34、前掲書、315p。
- (38) 注 34、前掲書、91p。  
インド＝ヨーロッパ語では、「存在する」も「生きる」も、「主語から出発して、主語の外で完遂する過程」だったと考えられるのである。
- (39) 注 10、前掲論文、39p。
- (40) 注 10、前掲論文、40p。  
ただ、吉野にとって、これは特別なことではなかったかもしれない。吉野は、教科書に掲載された自作の詩について、教師や生徒からの問い合わせにはすべて回答したと、1985年3月5日

発行の「読売新聞・夕刊」に掲載されたエッセイ「教職につく若い友へ」で明言している。しかし、その回答に対して、教師からのお礼の言葉は皆無に等しく「人にものを聞き、答えてもらったあとで、有り難うと言えない教師とは一体何者だろう」と吉野は問い、彼らに「指導者と意識の思い上がり」を見出している。「指導者」という存在への嫌悪感は、吉野の文学を理解するうえで重要な意味を持つだろう。

- (41) 注 10、前掲論文、40p。
- (42) 注 34、前掲書、293p
- (43) 注 34、前掲書、293-294p
- (44) 「吉野弘さんの横顔」と題されたこの文章は、注 6 の「笹 39 号 消息出版記念特集号」に書き下ろされたものだが、注 5 の『現代詩文庫 12 吉野弘詩集』に、作者自伝の代わりに吉野の希望で再録された。引用は、『現代詩文庫』収録のものより行った (103p)。「消息出版記念特集号」の編集を一人で行った、吉野より一歳年下の大滝は、1965 年逝去しており、再録には「大滝さんを追憶する」意図もあることことを吉野は同書で明かしている。

## 追記

吉野が参照した『日本昆虫記』について、気になることがある。文中での紹介したように著者の大町文衛は、明治期に活躍した大町桂月の次男であるが、扉に「先考桂月の墓前に献ず」とあるように、初版の上梓が丁度、桂月十七回忌の歳に当たり、そのせいもあってか、長男・芳文、三男・文男、四男・四郎が揃って序文を寄せている。序文の終わりには、兄弟の肩書が載るが、四男の項には「帝国石油会社社員」とある。この序の部分、確認できた限りでは、1949 年刊の五版以降は削除されているが、本文で記したように、「I was born」の作成に当たって参考にされたものは単行本のいずれかの版であり、もし初版を手にしていたら、吉野はこの記述を目にすることが可能だった。

大町四郎の文章中、「社用で出張した南米の一隅」という記述があるが、1937 年 10 月から一年半、コロンビアの地にあったことは、1939 年 6 月 9 日、石油技術協会例会での四郎の講演録から明らかである。旅行の目的はコロンビアの油田の視察であり、四郎が資源開発において一定の役割をしていたことが伺える。

また、「参議院通商産業委員会会議録三十七号」によると、1952 年 5 月 21 日の同委員会で「帝国石油株式会社の紛争解決に関する請願（第二〇八九号）」が取り上げられるが、紹介議員は沖縄県から選出された社会党の「島清」、請願者は「大町四郎外二十一名」となっている。内容は、「昨年九月以来の帝国石油株式会社の紛争は、現経営者の無暴な経営に起因し、これに経営者個人の不正問題も絡んでいるが、ことに資源庁勧告を無視したために危険坑井は十指を数えている等会社経営の基盤ともいべき油田の崩壊枯渇は火を見るより明らかであるから、同会社の紛争解決について善処されたいとの請願」とある。この請願に、油田開発の専門家である四郎の名があることは大きな意味があったかもしれない。

ここにある「紛争」は注17で取り上げたものを指しており、『帝国石油五十年史』によれば、経営陣の不正を告発したのは「労組」であり、会社側がその幹部に解雇通告を通告し、裁判での争いとなった。五月末、「ようやく労使間の紛争」が収まったがその仲介を行ったのは通産省であった。大町らの請願は功を奏したことになるだろう。

地方の事務系である吉野と東京本社の技術部門の四郎との間に仕事上の接点を求めるのは難しいが、もし、吉野が『日本昆虫記』で四郎とその肩書を目にしたとしたら、どのような思いを抱いたであろうか。この件、機会があればさらに探究してみたい。



